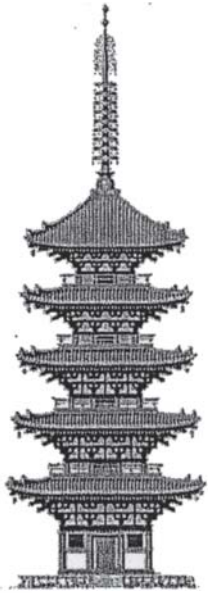


弘法さんかわら版

第133号

平成25年7月



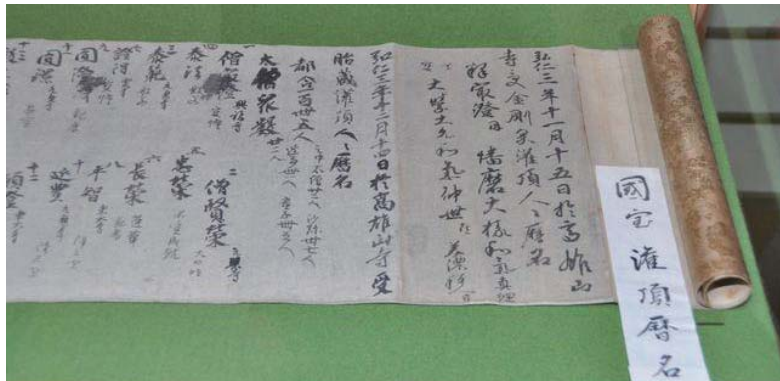
皆さん、こんには。最澄と空海の時代についてお伝えしている今年のかわら版。今月のテーマは**最澄と空海の訣別**です。

★高尾灌頂

八〇九年、空海は嵯峨天皇によつてようやく入京を許されま

す。その後、最澄の招きで**高雄山神護寺**に滞在。神護寺は最澄の施主(後ろ盾) **和氣(わけ)氏**の氏寺。ここから最澄と空海の交流が始まり、最澄は空海から密教の教えを受けます。
八二年、空海は十一月と十二月の二回、神護寺で最澄ら百四十五名に**結縁灌頂(けちえんかんじょう)**を行い、子弟関係を結びます。最澄四十六歳、空海三十九歳の時です。
この出来事は**高雄灌頂**と呼ばれ、灌頂の受者名を記した空海直筆の**灌頂歴名**は国宝に指定さ

れています。



国宝 灌頂歴名

★依憑天台宗と理趣釈経

結縁灌頂が行われて以降、空海と最澄はさらに交流を深めていきましたが、思わぬ展開となります。
八三年、最澄は天台宗が仏教の中心と説く**依憑天台宗(えひょうてんだいしゅう)**という

本を執筆。その中で**真言宗**の祖師のひとり、**不空(ぶくう)**の教えを批判したと言われています。その年の暮れ、最澄は不空の達意が盛り込まれた**理趣釈経(りしゅしゃつききょう)**、つまり理趣経の解釈本の借用を空海に申し出ます。しかし空海は「不空の教えを批判しながら、その達意を説く本の借用を願うとは納得できない。悟りは書物からではなく修行から得られる」として断りました。

★筆受と修行

最澄も空海も仏教の教えを学ぶ真面目な求道者。最澄は天台宗、空海は真言宗から究めようとしていました。
筆受の伝統を重んじる最澄、修行からの悟りを説く空海。究め方の違いから二人は別々の道を歩むことになりました。求道者の信念と違うことでしょうか。最澄の命で、空海のもとで修行していた最澄の弟子**泰範(たいはん)**。その泰範が最澄のものと別原因なかつたことも二人の訣別の原因という説もあります。が、事実は必ずしも明らかではありません。
泰範自身が**比叡山**に帰り辛い理由があつたため、空海が最澄にその旨を伝えたという説もあります。
經典の貸借や弟子を巡って二人が仲違いしたのでなく、求道者の信念から別々の道を歩んだと言えます。

★徳一との論争

理趣釈経を巡る一件を契機に、最澄は空海から密教の教えを授かることを断念。密教を究めることで朝廷の理解を得て、**比叡山**に**大乘戒壇院**をつくることを企図していた最澄。

以後はそれを諦め、**奈良仏教宗(小乗)**との論争を通じて**天台宗(大乘)**の正当性を証明することに注力しました。
八七年、**南都六宗**のひとつである**法相宗**の高僧、**東大寺の徳一(とくいち)**との論争も始まります。最澄五十一歳のことです。

最澄と徳一の論争は、最澄が亡くなるまで続き、決着しませんでした。

★高野山下賜

一方、**結縁灌頂**や**嵯峨天皇**の帰依によつて名声を得た空海。
八六年、空海は密教修行の道場として**高野山下賜**を嵯峨天皇に上奏。
まもなく下賜の勅許が下り、弟子の**泰範、実慧(じちえ)**が先に山に入り、開創準備に着手。二年後の**八八年**、空海も山に入り、いよいよ高野山開山。空海四十五歳の時です。

★最澄の晩年

最澄は五十六歳で亡くなり、す。来月は**最澄の晩年**についてお伝えします。乞ご期待。

